

第 8 回 (2009 年 11 月 25 日). 「貧困と『魔女狩り』」

Miguel, Edward (2005) “Poverty and Witch Killing”.

Review of Economic Studies, 72(4):1153-1172.

有本 寛

2009 年 11 月 25 日

1. 背景

- 貧困と犯罪の間には密接な関係があるが、貧困が犯罪の原因なのか、犯罪によって貧困が起こるのかははっきりしない。タンザニア西部では伝統的に「魔女信仰」が強く、しばしば「魔女狩り」（老婆の殺害）が起きている。「魔女狩り」が起きる理由として、信仰に基づく文化的なものと、経済的なものが考えられる。

2. 課題と方法

- 本稿の課題は、タンザニアの農村部を対象に、負の所得ショックが犯罪に及ぼす影響を定量的に分析することである。
- 本稿では、「魔女狩り」を説明する仮説として、負の所得ショックが「魔女狩り」をもたらすという経済的な要因による「所得ショック仮説」と、災難の原因を「魔女」に責める文化的な「スケープゴート仮説」の 2 つを掲げ、これらの識別を試みている。両者を識別するポイントは、スケープゴート仮説に基づく「魔女狩り」の引き金となる災難には、所得の減少をもたらすものと、そうではないものがあるということである。もし災難のなかでも所得の減少をもたらす出来事（降水異常）の場合のみに「魔女狩り」が発生するとすれば、スケープゴート仮説よりは所得ショック仮説の方が確からしいといえる。
- 仮説検証の戦略は、天水に依存した農業中心の経済であることに基づき、降水量を所得の代理変数として、村ごとの年次別の降水量の変動で殺人件数の変動を説明するというものである。
- データは、67 村の村レベルのデータと、1293 家計の家計レベルのデータを用いている。村レベルのデータは、回顧によって過去 11 年の間に起きた災害・災難、殺人件数を調査しており、これに降水量データを突合させたパネルデータとなっている。
- 観察単位は年ごとの村。被説明変数は殺人件数、説明変数は降水量および村の特徴を表す変数である。実際の推計は (2) 式に基づいている。村固定効果 (α_{2k}) を説明変数に加えているため、村ごとの時系列変動を使って、所得ショック（降水量）の年次的変動が殺人件数の増減に与える効果を識別している。

3. 結果

- 記述統計によると、各村で 5 年に 1 回の頻度で「魔女狩り」が発生しており、その被害者のほぼすべてが高齢な女性である。降水異常（干ばつもしくは洪水）は 6 年に 1 回、飢饉と伝染病も同じ頻度で発生している。
- Table 3 では、降水量と所得の相関を検証している。(1) ~ (3) は、2001 年の村レベルデータのクロスセクション分析であり、降水異常（干ばつ）は所得との間には負で有意な相関が認められる。一方、伝染病と所得には有意な相関はない。(4) (5) は村ごとの 11 年分の回顧データを使った固定

効果推計であり、降水異常の年には飢饉が発生した一方で、それは必ずしも伝染病の発生とは結びついていない。所得の分析（(1)～(3)）でクロスセクションデータしか用いていないのは、所得のデータが2001年しかないからである（回顧で調査しても測定誤差が大きすぎて使えない）。

- Table 4は、降水異常と「魔女狩り」の関係を検証している。降水異常と「魔女狩り」件数の間には正で有意な相関がある。一方、伝染病と「魔女狩り」件数の間に有意な相関はない。
- 以上のTable 3と4の結果から、スケープゴート仮説ではなく所得ショック仮説が支持される。まず、降水異常に対して「魔女」が責めを負うべきであるという規範は存在しない（人びとの意識の上では、「魔女」が殺された（魔女狩りされた）理由として、「魔女」が干ばつや洪水を起こしたからではなく、人を（呪い？）殺したり、健康を害したりしたことが原因であるとみなされている（p.1158））。このことから、信仰や文化的慣習に基づいて降水異常が「魔女狩り」を招いている可能性は否定できる。続いて、「スケープゴート仮説」が正しいならば、どのような「不幸」であれ、その原因である「魔女」の排除が要請されることから、降水異常でも伝染病でも「魔女狩り」が起こり得る。しかし、実際には降水異常しか「魔女狩り」の引き金になっていない（Table 4）。降水異常は所得の低下をもたらす一方で、伝染病は必ずしも所得の低下をもたらしていない（Table 3）。よって、「魔女狩り」は負の所得ショックによって引き起こされた蓋然性が高い（p.1167 上部参照）。
- 以上のように、降水異常は負の所得ショックをもたらすと同時に「魔女狩り」の確率を2倍に高めることがわかった。また、伝染病は「魔女狩り」の要因とはなっていないことも確認された。これらの結果、「魔女狩り」は文化的な理由よりは経済的な理由によって起きている可能性が強い。ただし、「魔女狩り」が多く発生している地域は伝統宗教が信仰されていることから、魔女信仰が負の所得ショックと並んで「魔女狩り」の必要条件にはなっている（p.1169）。
- こうした「魔女狩り」を減らす方策として、警察による取り締まりや保険の整備、年金給付が挙げられる。南アフリカでは年金給付の開始によって、「魔女狩り」が劇的に減ったという説がある。

4. コメント

- この論文のポイントは、所得の代理変数として降水量を使っていることである。仮に所得データを経年的に得ることができ、所得と「魔女狩り」の間に負の相関が確認できたとしても、「負の所得ショックが『魔女狩り』の原因である」とは必ずしもいえない。なぜなら、「魔女狩り」などの犯罪が所得の低下をもたらしたかもしれない（逆因果関係）、政情不安など所得低下と犯罪のどちらにも影響する交絡要因があるかもしれないからである。よって、「魔女狩り」とは直接無関係なものの、所得とは相関する操作変数が必要となる。降水異常は（人びとの意識の上では「魔女狩り」の理由ではないため）直接「魔女狩り」の要因ではないが、所得の低下と相関していることから、操作変数としての性質を満たしている。このことによって、降水異常が負の所得ショックを経由して間接的に「魔女狩り」を引き起こしたという因果関係を識別することができる。ただし、本論文では所得データが経年的に得られないため、降水異常を操作変数として所得を回帰することができず、そのまま代理変数として直接「魔女狩り」件数を回帰している。
- なお、人びとの意識の上では、「魔女狩り」は「魔女」が人を殺したり、健康を害したりしたために起きたと認識されている。この認識が正しいかどうかを確かめるには、「魔女狩り」以外の殺人や死亡数（率）を説明変数に加えることも考えられる。